

“She desired cold water, a beaker of cold water” Virginia Woolf, *Between the Acts* における天候／大気と情動のあわい

柳澤彩華

1. はじめに

Virginia Woolf の遺作 *Between the Acts* (1941) は、主に屋外で展開することから、自然表象やパストラル性について論じられてきた。Jed Esty に代表される late modernism 研究は、野外劇や田園的共同体への志向を、帝国縮減後の Englishness 再編成の問題系に位置づけている。他方、近年のエコ批評やポストヒューマン的読解は、本作に散見される原始時代への言及を、人間中心主義を攪乱する地質学的時間や絶滅の想像力と結びつけてきた。しかし、こうした前史や地球規模のマクロなスケールと、登場人物たちのミクロな情動とが、テキスト内部でいかに交錯しているかは、なお十分に問われていない。本稿はこうした研究を踏まえつつ、本作の天候／大気に注目し、それらを単なる自然環境や非人間的スケールとしてではなく、personal な情動と impersonal な外部が交差する媒体として読む。Eve Kosofsky Sedgwick の *The Weather in Proust* (2011) と Dora Zhang のモダニズムにおける atmosphere 論を手がかりに、大気が戦争前夜の閉塞感や不安を増幅しながらも、同時に登場人物たちの知覚や情動を微細にずらししていく両義的な働きを明らかにする。特に煙と雲は、人為と自然、現実と演劇の境界をなし崩しにする特異な大気的モチーフとして注目に値する。最終的に本稿は、夫婦の私的愛憎や戦争暴力として読まれてきた結末の Isa と Giles の「闘争」を、非人称的外部に触れた芸術が、閉塞した情動を別様に再演しうる場面として読み直す。

2. 牧歌的自然の反転——Sedgwick の気象学的読解へ

本作に見られる自然は、牧歌的な自然環境のみならず、異性愛的関係の愛憎や所有欲、排除の力学を増幅する修辞としても働いている (Isa と Rupert の白鳥の幻想や Mrs Haines の嫉妬、Giles と Mrs Manresa を結ぶ “thread” など)。だが、本作にはもう一つ重要な自然の要素がある。それが天候や大気である。Sedgwick は *The Weather in Proust* において、精神分析家 Michael Balint の良性／悪性退行の区別を、「転移」の二つの型として読み替える。要求が自己増殖的に反復される悪性転移に対し、良性転移とは対象の “mode of being” によって主体が支えられ、良い変化へと開かれる関係である。Balint が空気や水のような element をその支持的関係のモデルとしていた点を、Sedgwick は文字通りの天候や大気の問題へと拡張する。ここで重要なのは、転移とは、忘却された自己や過去の関係形式が、現在の場において再び作動する過程だという点である。Sigmund Freud が転移恋愛を “a complete change of scene” と呼び、劇の上演中に現実が侵入する場面になぞらえたように、転移にはそもそも上演的な構造がある。Sedgwick の Proust 読解においても、天候は過去を単に想起させるのではなく、感覚的環境を通じて主体の “forgotten selves” を現在において再び生起させる媒体として働いている。これをふまえ本稿は、*Between the Acts* における天候／大気を、閉塞した情動や人間関係を別様に再演させる媒体として読む。

3. 予測不能な空——近代気象学の逆説と戦時下の不確実性

ただし、Sedgwick の weather 論を、戦争前夜の閉塞感や不安を帯びた *Between the Acts* にそのまま重ねることはできない。当時の Woolf の日記によると戦争の暴力は、まず大気を振動させ、身体に介入する音や風として経験されていた。この戦時下の大気感覚は、本作に間欠的に現れる死や暴力のイメージとも共鳴する。この閉塞感は、登場人物間においても増幅され、劇の開演を待つ場面における “We’re too close; but not close enough” という一文は、過剰な近接となお満たされない隔たりという逆説を同時に示唆している。ここにあるのは、欲望が自己増殖的に反復されつつ決して満足に達しない悪性転移を想起させる関係性である。さらにこの場面の気温の上昇、雲の消失、陽光によって “laid bare” にされた風景もまた、この閉塞を外的な環境条件として増幅する。さらに天候は、未来予測の不確実性の問題とも結びついている。Woolf の日記に登場する “Armada weather” は、天候が英国を再び救うという歴史的反復への期待を一瞬立ち上げるが、直後の if 節の連鎖は、未来がそうした神話的物語によって保証されないことを露わにする。予測への欲望と不確実性の露呈というこの問題は、Barry Sheils が論じる近代気象学の逆説とも響き合う。Lewis Fry Richardson による 1922 年の数値気象予報は、過去の反復ではなく現在のデータから未来を算出しようとしたが、その試みはかえって、起こりえた無数の未来を開いてしまう。*Between the Acts* においても、Mr Oliver が読み上げる “Variable winds; fair average temperature; rain at times” という予報は、予測の形式を取りながら、不確実性そのものを言い換えているにすぎない。この不確実性は、やがて “blue, pure blue, black blue” という、人間的意味づけを超えた領域へと語りを出す。この “blue” は “escaped registration” とあるように、気象学的記録からも感情的投影からも零れ落ちる impersonal な外部として立ち現れる。したがって本作における天候／大気とは、閉塞と不安を増幅しながら、同時に人間的知覚をその限界へと押し出す媒体なのである。

4. 情動を組み替える大気——字義性と比喩性の往還

だが本作は、非人称的な“blue”の次元を暗示しつつも、完全な「人間不在」の領域へ向かうわけではない。むしろ焦点は、人間的情動と非人称的外部とが交錯する場へと戻る。Dora Zhang が論じるように、atmosphere＝大気は物理的な空気であると同時に比喩的な雰囲気でもあり、主観的ムーードにも客観的事物にも還元されない。その曖昧さが、Georg Simmel が社会の「微視的・分子的」なレベル、つまり人と人の間に生じる微細な情動の変化を捉えている。この作用は、本作においてはまずジェンダーの構造と関わる。Oliver 家の男性たちとは対照的に、Lucy と Dodge の場面では、そよ風が二人のあいだを通り抜け、Lucy の瞳の「冬の青」を「琥珀色」へと変化させ、「少女の微笑み」を湛えさせる。Dodge もまた自身の傷ついた過去を告白したい衝動を抱き、結局は沈黙するものの、語られなかった傷はそよ風が吹き抜ける描写へと引き継がれ、大気のなかに余韻として残るのである。Isa の場面でもまた、大気は情動を身体的水準へずらす。開演を待つ閉塞した空間で、Isa は愛や憎しみの「鈍い矢」に晒されながらも、彼女が強く意識するのは対他的な愛憎ではなく、「冷たい水」への渴望である。属人的な愛憎は、渇きという一次的で impersonal な欲求へと横滑りするのだ。このように大気は、閉塞した関係性を外から救済するものではなく、身体感覚を通じて、情動を内部から微細に組み替えていく媒体として機能する。

5. 「煙」と「雲」の変奏——人間的想像力と非人称的外部のあわい

最後に、大気の形象は自然と人為、現実と演劇の境界そのものを不安定化する。ここで重要なのが、煙と雲である。煙は煙突・火・煙草といった人為的営みに結びつき、雲は自然の領域に属する。しかし両者はいずれも、可視的でありながら輪郭を持たず、変形し、拡散し、消失する。*Between the Acts* は、この二つのモチーフを反復・変奏することで、人為と自然の境界を曖昧化していく。たとえばヴィクトリア朝劇の場面では、Pointz Hall の煙突から上がる煙が、現実の屋敷を劇中の家庭空間へと転換する契機となる。煙は現実の物質でありながら、劇的 atmosphere を生成し、観客を過去との転移の関係へと引き込む媒体となり、観客の身体的記憶や情動を作動させる。たとえば、Mrs Lynn Jones はヴィクトリア朝の“Home”の懐旧に浸りながら、同時にそこに“unhygienic”な腐敗を感知する。また Lucy は、役を演じることで自分のなかの“unacted part”を揺り起こされたと感じる。つまり劇中劇は、歴史を保存する装置ではなく、atmosphere を通じて自己と過去との関係を再演的に組み替える媒体なのである。この動きは、劇の終幕後に La Trobe が自らの劇を「他の雲たちに混じり合う雲」に喩える場面で反転し、今度は人間的営為である演劇が、雲という自然現象へと移し替えられる。さらに La Trobe は、雲のない空のもとで「二つの人物」と「最初の言葉」を幻視し、その後、煙草の煙を通して新たな劇的ヴィジョンを得る。ここで煙と雲は、現実と劇、自然と人為のあいだを往還する大気的モチーフとして機能しているのだが、重要なのはこの大気的な変位が 芸術家 La Trobe 一人に閉じないことである。終幕後、劇は“the sky of the mind”に残り、「他の雲たち」に混じろうとするものとして Oliver 一家の観客の知覚に残留する。そのとき Isa の意識は、Bartholomew のチェルトの煙を通して、芝居そのものを越えて「散り散りになっていく観客たち」という現実に至る。つまり、劇の残響は煙／雲の連鎖を通じて Isa の現実認識を変容させる可能性を示唆するのである。この観点から最終場面の Isa と Giles の対峙も読み直すことができる。“Then the curtain rose. They spoke”という最後の一文は、単なる夫婦間の愛憎や戦争暴力の反復ではない。この野外・原始的場面は、La Trobe が煙を通して幻視した「二つの影」と「最初の言葉」と明らかに共鳴している。したがって、この結末の原始性や野外性は、人間的なものの消滅ではなく、個人の内面に閉じない情動や記憶が、大気と演劇を通じて再演される impersonal な場として読まれる。本作の大気は、自然との安易な調和や救済をもたらすものではなく、人間が世界を完全には意味づけられないことを露呈させる。しかしその不可能性のただなかで、芸術はなお、不定形な「大気」との交わりを通じて閉塞した情動を別様に配置し、現実を見直し、関係を生き直す形式を生み出しているのである。

主要参考文献

- Balint, Michael. *The Basic Fault: Therapeutic Aspects of Regression*. Northwestern UP, 1992.
- Esty, Jed. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England*. Princeton UP, 2003.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *The Weather in Proust*. Duke UP, 2011.
- Sheils, Barry. “The Meteorological Device: Literary Modernism, the Daily Weather Forecast and the Productions of Anxiety.” *Modernism/Modernity*, vol. 31, no. 1, 2024, pp. 23–44.
- Woolf, Virginia. *A Writer's Diary: Being Extracts from the Diary of Virginia Woolf*. Edited by Leonard Woolf, Hogarth Press, 1959.
- . *Between the Acts*. Oxford UP, 2008.
- Zhang, Dora. *Strange Likeness: Description and the Modernist Novel*. U of Chicago P, 2020.